



目 次

釋迦如來の名號……………	本 多 日 生
信行の基調を説ける觀音賢經……………	井 村 日 成
すゝみゆくみち……………	原 口 晃
七つの變……………	長 谷 川 義 一
聖訓を拜讀して……………	藤 原 幸 八
記事報導……………	



主筆 本多日生 初號來る二月十一日發刊

# 教

毎月一回十一日發行ボケツト型百頁  
一部金拾錢郵税五厘半年以上前金ハ郵税不要

- 一、教は廣く人心を教養感化するを以て目的とす
- 一、教は東洋思想の特色を發揮し世界思潮を融合するを以て主義とす
- 一、教は東洋文化の重要な歴史的事實と聖者偉人の言行を紹介す
- 一、教は現代健全なる思想家の意見を掲載す
- 一、教は各人人格の修養に資すると共に國家の秩序ある發達に寄與し東洋民族の使命天職を闡明せんことを期す

東京市外品川町南品川四二二  
「教」發行所

振替東京一〇九四〇番

## 教義信條の整束 (其五)

(大正十四年七月五日統一閣に於ける講演)

### 釋迦如來の名號

二、二種の理想……本、教義の正系傍系……へ、法華經教義の理想……ト、法華經教義の理想……チ、經旨の歸結妙處

### 二、二種の理想

本多日生

前回には釋迦如來の名號に關して、その話に入る前に先づ釋迦如來の尊さと、法、真理、經典、いろいろさういふ大切な事との關係をお話いたして、法は尊い、真理は尊い、お經は尊いと考へても、絕對本佛の尊さに對して、それが上になるとか、より尊いとかいふやうな考へ方を考へるのは、實相にも背いて居り、經典にも反いて居り、我等の信仰上認むべからざることであるといふことを闡明致したのである。續いて第二には、一切經の上から起つて各宗の主張となつた、佛教の中に澤山の佛様や菩薩様の名前が現れて居る、或る者は彌陀を信じ、或る者は藥師を信じ、或る者は觀音を信じ、一佛教中に於て多神教の觀を呈して居るが、それは義に於て容すべからざるのみならず、釋迦牟尼如來の名號を考へたる時に、左様ないろ／＼の佛の名前などは皆な釋迦如來の御名の中に攝收統一さるべきものであるといふことを、いろいろお經を引き、意義を明かにして、釋迦如來の名號が一切の佛の御名を統攝して居ること、及びその

功德の廣大なること、を論明致したのであります。

この二つは、一は以て、佛敎の哲學的研究に従事して人格實在、本佛の首嚴に達し得ないところの理智の不透明なる人達に教を與へ、一は以て、各宗と低級なる人達が佛敎の中にいろ／＼の佛や菩薩があつて、それを信しても宜いのである、或はお釋迦様よりヨリ以上に或る佛などが尊いのだと言つて釋迦如來の御名を忘れ、御徳を忘れて他に心を走せるといふことは、これは正當な思想ではないといふことを明かに致した次第であります。

そこでモウ一つ大きな大切な事が残つて居る。それは日蓮門下の僧俗の考の中にあることで、これも二つの傾向がある。一つは、南無妙法蓮華經と唱へることが有難いことから、どう考へてもお釋迦様、またお釋迦様のお名前は軽いものだ、お前が言ふはごお釋迦様が有難くてお釋迦様の名前が大切なら、ナゼ日蓮聖人は「南無釋迦牟尼佛」と唱へしめなかつたのであらうか、だからお前の議論はうまいやうだけれども何處かに無理があるのだ、こつちは學問が足らぬからお前に言ひくめられるのだけれども、どうも腹の蟲が承知をせぬ、何處かそこに残つて居る所があらうといふ、この妄執——吾々から言つては妄執といふものが引かゝるのである。尙ほ唱へ言葉が「南無妙法蓮華經」であるばかりでなく、曼荼羅の中心に「南無妙法蓮華經」が非常に大きく書いてある、お前が言ふお釋迦様などは小さく他の佛や何かと同じ位な太さでヒヨロ／＼と書いてあるぢやないか、どうも曼荼羅を拜した所から考へてもお前の議論に無理があるやうに思ふ、何としても蟲が承知をせぬ、斯ういふやうに考へて居る。これが永い間の日蓮教學上の累を成して居るのである。

モウ一つはその反對に、だん／＼研究して解つて來ると、お釋迦様が有難いのだ、それはモウ間違ひない、お經を研究しても、道理から考へても、いろ／＼考察するといふと、これは日蓮聖人が「南無妙法蓮華經」と仰しやらなければ宜かつた、間違ひだとハツキリ言ふと少し恐れ多いけれども、どうも彼處の行き方はモウ少し考へ様があつたのではなからうか、曼荼羅の書き方もどうも少し感心しない、さういふやうな所から、恐る／＼ではあるけれども腹の蟲が謀叛を起さんとして居る、露骨に言へばその人達の考へは、唱へるお題目も、曼荼羅の中にも大字で書いてあるのも、ちと邪魔になる、邪魔になると言つては恐れ入るけれども、少しどうも困る、どうも具合が悪い、どうも……どうも……といふやうな事を言つて居る。それは一應はサク考へるのも無理ならぬことであるけれども、この佛様が有難いことは間違ひないけれども唯だお題目が邪魔になるといふやうな考へと、それから佛様は有難いかも知らんけれどもとにかく吾々はお題目を唱へて居る、本尊の曼荼羅には題目が中心となつて居るからして、理屈は言はぬけれども、説明は出來ぬけれども、どうもお題目の方が佛様よりは有難いのだらうと思はれるといふ、この二つ、このハツキリしない二つの病が日蓮教學に残つて居る以上は、今後内部にも教義信條の動搖を來し、外に向つて宣傳の活動を鈍らすところの恐るべき弊害をそこに伴ふのである。これは最も明晰に解決をして置かなければならぬ。

### ホ、教義の正系傍系

そこでこの二つを先づ目標に置いて、サクして左様に苦しまなくとも本來明瞭であるのを、自分の研究

が足らず、考察が透明を缺くことに於て左様な結果になつて居る、可哀相な人達ちやといふことを諸君はよく領解をして、ナクしてそれ等の人達に教へてやらなければならぬと思ふ。

それに就てはこの問題の研究順序として、どうしても原則上明かにして置かなければならぬことがある。それは日蓮教學の上に二つの分類をしなければならぬ。一つは「經旨よりの正系」一つは「對宗よりの傍系」といふことである。いろ／＼と御遺文にお記し遊ばされた大聖人の御教義は二つの見別けをしなければならぬ。一つは法華經の精神から來たところの正しき系統に屬する教義、一つは他の宗旨に對する考より來つたところの傍系に屬する教義といふことである。他の宗旨に對する教義といふ中には、彼等の考を導く爲めにそれに似寄つた事を言ふ場合もあり、それを打碎く爲めに彼等の尊んで居るものと同じやうなもので、ヨリ勝れたものがあるといふことを言ふ場合があるのである。又その外にも他の宗旨の影響を受けて、時代の影響として、導く爲めでもなく、打碎く爲めでもなく、スラ／＼と世間並みの事を言はれることもあるのである。それは誰にもあることである、その時代にズックと世間に動いて居るところの思想で、それを導く爲めでもなく、碎く爲めでもなく、大して大切でない場合にはその動いて居る思想その儘を言ふことがあるのである。さういふ傍系に屬する教義は軽い、正系に屬する教義は重いといふことの原則を明かにして掛らなければ、いま申した問題は解決することが出来ないのである。

さうして斯様な分類は、今私が初めて考へついた事ではない、昔から日蓮教學研究上の原則として定められて居ることである。それ故にこの問題に就て前に述べたやうな迷ひの起ることは第二にして置いて、間違ひのない法華經の精神から來たところの日蓮聖人の教を領解して、それから對宗的の傍系に屬する教義を觀察して、それを取捨按して行きさへすれば、前に雜問題の如く考へられた事が、少しも困難ではなく當然なる解決が出来るのである。故に經旨の正系教義といふものを最も明瞭に確認して置かなければならぬ。

### へ、法華經教義の理證

そこで法華經の教を明かにするには、たゞ經文の證據から入つたのみでは本當は頭腦に入らないのである。法華經を貫いて居るところの大真理、法華經に現れて居るところの大哲理、即ち「理證」と申して眞理上の證明を明かにして、次に「經證」と申してお經の文句の上の證據を明かにしなければならぬのである。斯ういふ重大な問題は、理證を有たないやうなもの論ずるに足らない。文句をしばらく離れて、チヤンと眞理上の説明をして見る、斯ういふことにならなければいけないのである。日蓮教學の多くの紛亂葛藤は、唯だ文句の網渡りみたやうな事をして、「此處に斯う言うてある」「そんなら此方にこんなものがあるぞ」と言つて矛盾したやうなものを突き出して、サウして少し餘計に數を覺えて居つた方が勝つといふやうな譯で、向ふの氣附かぬやうな所を隠して置いて、いよ／＼といふ時になつて「サアどうぢや、これでもかッ」といふやうなことを言ふ、そんな愚な研究法を以て、今後日蓮主義を世界の思想界に發揚することは出来ない、そこで先づこの理證を明かにせんければならぬ。

さうすると法華經の實相論は、しば／＼お話しした通り人格實在論である。たゞ空漠なる相の見えないやうな眞理が存して居るのではない、その不變の眞理はその儘隨緣の諸法である、隨緣の諸法は山や河が起

伏して居るのではない、そこには迷へる者と悟れる者との十界のものが歴然として存在して居るといふ、十界の人格實在を以て法華經の實相論とするのである。實相であるからといつて、譯もわからぬ、たゞ鉛筆で線を引いたやうな、そんなものを狙つて行き居るのではない。又すがたがあるからといつて、山や河を目標に研究をして居るものではないのである。少なくとも魂を有つて居るものが存在をして居ること、に於て、その魂が迷つて居るものと悟つて居るものと、迷つて居るもの、中にも悟りを有つて居るといふやうな、人格の問題に入つて初めて宗教の意氣があるのである。簡單に申せば、法華經は迷へるものと悟れるものとの始なく存在せることを、これを哲學的に人格實在として論議したるものが法華經の眞理であります。然るにその上にモウ一つ眞理があるといふやうなことを言つたら、それは何でありますか、それは哲學上の抽象實在論であつて、これを空想と申すのであります。そんなものはありはしない。例へば南無妙法蓮華經は十界の頂上ちやと言ふ、予の友人の日蓮主義者、日蓮教學の學者の中にもそんな事を言つて居る人がある、南無妙法蓮華經は十界の頂上である、頭の上であるといふ、ちよつと聞くとエライ氣が利いたやうであるけれども、實はズラツと抜けてしまつて居る、佛でもなければ衆生でもなければ、その上であるといふやうなことは、哲學上の考察に於ては許すことが出来ない。而して左様な考に提はれて居る者は抽象實在論者といつて、誠に思想の低い者となつて居るのである。さういふことは人類文化の智識に於て研究して居るところの、一般の法則を尊重しなければならぬ。左様に具體的の實在と抽象的の實在との優劣關係もわからぬやうな者が、日蓮教學の大家を以て自任するといふは、それは僭越である。

そこで人格實在の中に、迷へる者だけの實在を見て居る思想があるけれども、それでは眞の實相ではないのである。眞の實相は、悟れる佛も久遠無始の實在者である。それは法華經に於ては「壽量品」に、我が釋迦牟尼は始なき以前よりの存在者であるといふことを明かにせられた。日蓮聖人の御遺文では「開目鈔」には「無始の佛界」と書かれ、「觀心本尊鈔」にも「五百塵點乃至所顯の無始の古佛」と併せられた、「無始」といふことが本佛には必ず附いて居る「久遠」といふ言葉を使うても初めを置くのではないから、久遠であり無始であるといふのである。たゞ古い、併し始のがあるといふのではない、それ故に五百塵點といつて古い、さうしてモウ一つ言へば始のなき無始の古佛であると申されて居る。斯ういふことも定つて居る事である、日蓮教學上に於て本佛釋迦如來の久遠無始の人格實在を認め得ないやうなものは、これ亦問題にならぬ不透明なあたまである。

さうするとこの久遠無始の本佛が儼存せられて居る、これが宇宙實相の中の中心である。他に迷へる者があるにしても、その迷へる者は悟れる佛によつて救はれなければならぬ。山や河はそんなものがあつて見たところが、多く價值を認めることは出来ない。恰も日本に於て言へば、日本に政党があり、日本に國民があり、山があり、河がありしても、皇室の尊嚴が一番有難いやうなものである。富士の山が有難いとか、吉野山の櫻花が有難いとか、或は幡隨院長兵衛がえらいとか、そんな事を言つて居つては日本はわからぬ。きれいな山もあれば立派な人間もあるけれども、その中樞は天津日嗣の後裔として萬世一系の皇統、連綿盡きずして存在せられて居る、「神州孰か君臨す、萬古天皇を戴く」といふ所に日本の眞價はあるのである。「宇宙たれか君臨す、萬古本佛を戴く」といふことに於て、初めて實相の眞價を見なければならぬ。

日本を研究して「神州執君臨、萬古戴天皇」といふ意味がわからぬやうな學者は、それは憲法學者であらうが、歴史學者であらうが、道徳學者であらうが、探るに足らないものである、眞に日本を解し得ないものである。佛教を學んで實相だの眞如だのナンだのといくら言つた所が、この尊き本佛の始なき以前よりこの全法界に君臨して居るところの主師親の絕對者であるといふことを認め得ないやうな者は、佛教に於て全然惡知識と論斷して宜いのである。そこに日蓮教學の眞價値は輝いて居るのである。

そこでこの本佛は如何なる活動をなさるか、その本体は實在である、これはモウ申すまでもないが、その活動は無限である。唯だ無限と言つてはわからないが、それがどう出て來らるかといふと、第一御心に慈悲が動く、その慈悲は間斷なく「毎に自から是の念を作す」と仰せられて、何時も「一切衆生を救はずんば已まんといふ熱烈なる慈悲の御心に満ちてお居でなさるのである。それが「何を以てか」といふことに動いて、この御心の活動がこの世に身を現はして「現身」といふことに相成るのである。どうしても本當の親切があつたならば、其處に寄つて行かずに居れるものではない、必ず子供が可愛いと思つたならば、その子供を引き寄せるとか、子供の側に寄つて行くものである。男女の關係でもその通り必ず接近して行く、相抱擁するものである。阿波の十郎兵衛の娘お鶴が過番になつて親を尋ねて歩く、その親子の邂逅つたところを芝居で見ても、母親のおゆみが名乗ることは出來ないけれども、吾が子だといふことがわかつて、お鶴の手を握つていろ／＼優しい言葉をかける、お鶴も「そんなに優しく言うて呉れるおなははお母さんではないか」といふ、「イヤさうではない」と氣強いことをいふけれども、なか／＼握つた手を放すことが出來ない。さういふやうに近づいて來る力がなくては本當の親切はない、佛様や神様が人

間を救うて下されるといふには、本當の活動があつたならば人間の世の中に出て來て、自ら範を示し教を垂れて導いて下さる方が、一番親切の徹底して居るのだと言はなければならぬ。

そこに佛教では「如來」といふ言葉が起つたのである、その絕對の本佛その儘がこの世に來る、「如」といふのは眞如實相といふことで、完全なる實相のその儘が人間を救ふが爲めに、人間に似たやうな相をとつて、人生に出て來らるといふので、如のま、が來ると書いて「如來」といふのである。そこで釋迦さまは「我はこれ如來なり」と申されたのである。この世に出て來ないものに如來などといふのは、これは坊さんが無理にくつつける文句である、坊さんは「不來即來、來即不來」といふやうなことを言つて「來ても來ないのぢや、來ないでも來たのぢや」といふやうなことを言ふ。借金を拂はなくても拂つたのぢやといふやうなことを言ふのが坊さんの弊である、けれどもさういふことは決して健全なる思想ではない。「如來」といふ言葉に相對するものは「善逝」といふ言葉であるが、善く逝くと書いてある、善く逝くといふのはこの人生に現れた目的を完了して、他に遷るべき目標が定まつて、説くべき法を説き了り、度すべき衆生を度し了り、一期の目的を完了して笑を含んで人生を去つて行くのを之を善逝といふのである、この世に出て來なければ如來もなければ善逝もない。そこで釋迦如來のみは本當の「如來」である、釋迦如來のみが眞實の「善逝」である。

この身を現はし給ふ、これが今度迦毘羅衛城の悉達太子として、後に釋尊となられたばかりではない、千變萬化限り無き自在の活動を、三世の時間を貫いて、十方の世界に應現限りなき活動をなさるのも、悉く一本佛の大慈悲中より出たものである、どの位澤山の佛がさういふ時代に出て居つても、三世十方に無

限の活動をなされるものは、始のなき以前よりの本佛の活動なりといふことを教へたのを、之を法華經といふのである。そこで澤山の無量身といふものがあつて、多くの名前がわかれて居つても、「名字不同」となつても、悉くこれ本佛の現はれである、一本佛に併につけた名前であるといふことになる。

一方にはこの大悲が、身を現じたのみでは事足らんからして、「説法」となるのである。即ちこの慈悲が口に働らくからして説法教化となつて來るのである。外にもいろ／＼教化はなされる、説法に依らずして或は密に人の心の中に入つて、知らない裡に人をして善心に還らしめたり、人を導き給ふたり、吾々の知らない所に不思議の救ひをお與へ下されて居ることは量るべからざるものである。或は餓鬼や畜生のやうな仲間に入つて救済をされる時には、犬を集めて説法をすることも出来ない、蛙やゲヂ／＼に話をすることも出来ないから、吾々の知らない方法を以て佛は慈悲の救ひをなされて居るだらうけれども、吾々が人生を中心にして考へる佛の活動は説法教化である。それ故に宗旨を開いて問題になつて居るのも、犬の救済やゲヂ／＼の救済といふやうなことは先づ問題ではないのである。廣くいへばそこにも意見はある、一切經を見れば説法やさういふことに依らずして救ふといふことは、文珠あたりは屢々言うて居る、説法なごをせんでもよい、匂ひで救ふことも出来る、犬のやうなものを救ふのであつたならば匂ひの方が宜いかもわからん。食物で救ふことが出来るといふことを言つて居る場合もあるけれども、人間は「三根利にして三根鈍なり」といふことになつて居るのであつて、鼻と舌と觸覺といふものは向上の力が薄いのである。あの人を撫でてやつたからえらくなつたといふことはない、それは肩の凝りが除れる位のものである、三年あの人を撫でてやつたから非常に立派な者になつたといふことはない、三年好い匂ひを嗅がせたからえ

らい者になつたといふことは言へないのである。うまい物を食はしても向上はしない、却つて墮落するのである。吾々は眼に於て善き事を見、書物を見、耳に於て良き聲を聴き、善き話を聴き、意に分別をするといふ、眼と耳と意の三つより外に向上すべきものはないのである。その中に於ても深遠なる事柄になれば、耳より外には役立たないのである、眼で見せることの出来るのは低いことである、科學實驗の知識などは眼が本意であるが故に、科學は哲學、宗教には到底及ばないのである。現代文明は眼以下に造らうとするものであるから、モツと高い耳を通して進むところの哲學、宗教、道徳のごとき、高遠なる理想が溢れてしまふのである。お釋迦さまはその事をちやんと知つてござるから、眼で人を救ふといふよりは耳に就て救ふ爲めに、一代五十年の間縦横に説法教化をなさつた譯である、この説法が一切經となつたのである。併ながらこの現身も説法も、元に戻せば釋尊の御正覺、釋尊の御智慧、釋尊の御慈悲、釋尊の御心を通して現はれざる限りには、佛敎といふものは無いのである。これはご名前が違ひ佛や菩薩の相が違うても、本佛の慈悲を通さずして現れたるものはないといふ事を説いたのが、法華經の如來壽量品の思想となつて現れて居るのである、この本佛の慈悲を「每自作是念」の意輪と申すのである、この慈悲から現れて「以何令衆生」、何を以てか衆生を救はんとして、「何を以てか」といふ手段の中に身を現じ法を説くといふ形聲二益の働きを現はしたものである。であるから「每自作是念、以何令衆生」と言つたならば、その中に始め無き以前よりの絶對の本佛の本体と、その御慈悲と、その身を現はし給ひ、その法を説き給ひて、自在に活動して居るといふことを言ひ現はして居る、それより外には佛敎は何もないのである、この根本の哲學的思想に到達せざるが故に、日蓮教學は紛亂を重ね、洵に愚なる思想が跋扈するのである。吾輩は

曾て「法華經講義」を講述したる時より、本佛三輪の妙化を知らざる者は法華經に透徹することは出来ぬといふことを斷言して居るのである。

これは吾輩の發明ではない、法華經の壽量品を本當に讀んで見たならば、その通りのことが説いてあるのである、誰にもわかることである、日蓮聖人が「開目鈔」に力説せられたことも、この御意に外ならないのである、それだけは諸君が考へて見なければならぬ。吾輩が言ひ居ること、法華經なり日蓮聖人の大切な遺文なりとの間に齟齬があるか、無理を言ひ居るかといふことだけは、諸君が判斷をしなければならぬ、幾ら大きな聲を出しても間違つて居れば「それは違ふだらう」と言はなければならぬ。そこに間違ひがないとすればこの話を根本に頭の中に据えつけて、前の問題の解決に當らなければならぬ。

この事は前回にも簡略に申ししたことであるから、今日はこの話は省いて進みたいと思つたけれども、併しこれが明かでないとき先きに進んで大事なことを解決する場合に徹底を缺くが故に、重複を知りつゝもこの事を申し述べたのである。

### ト、法華經教義の經證

そこから今度は經證、即ち法華經の經文に現れて居るところの證據であるが、これは非常に多いのである。「壽量品」の中に於て擧げれば、佛を良醫に譬へたまひ、さうして身を現はすのを醫者が他國から歸つて来たことに譬へられ、一切衆生は毒を服んで本心を失へる者、失はざる者あることに譬へられ、それを救ふが爲めにいろ／＼教を説いたが、最後に擠き符ひ和合して良藥を子供に與へて服せしむるといふ所に

於て、段々要を取つて一切經より法華經となり、法華經より壽量品となり、壽量品を纏めて南無妙法蓮華經の五字七字として、これが一切の説教に代つて、そこには好良藥を今留めて此に在くが故に、汝等取つて服せよといふことを仰せられたのである。であるから之を醫者と藥といふやうに考へると、その間の關係が斷れるけれども、前にいふ三輪の妙化として考へたならば、法華經といふものは佛の御心から離れることは出来ないのである。今の多くの日蓮門下のやうに、法華經とお釋迦さまとを切り離すといふやうなことは、殆んど意味をなさない。法華經の教の魂は壽量品である、その壽量品は佛様の有難いことをグ／＼と説いたのである、それをランビキにかけて行けば何が出て来るか、幾らたゞいてもふるつても、一番善い所に行けば佛様の有難いことが擠き符ひ和合されるのである。

それ故にこの事を最も適切に現はしたるものは「勤發品」の經文である。

若し是の法華經を受持し讀誦し正憶念し修習し書寫すること有らん者は當に知るべし、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見たてまつるなり。佛口より此の經典を聞くが如し。當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛を供養するなり。當に知るべし、是の人は佛善哉と讀む。當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛の手をもつて其の頭を摩でられん。當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛の衣に覆はるゝことをん。

若しこの法華經を受持し正憶念すれば、それが釋迦牟尼佛を見たてまつつて、佛の御口からこのお經を聴くと同じことである。それ故に法華經を受持し正憶念する、それが釋迦牟尼佛を供養して居るのである。故に誰からお讀みの言葉を戴くかといへば、お釋迦さまから讀めて戴いて、お釋迦さまの手で頭を摩でて貰つて、お釋迦さまから衣を着せて貰つて救うて貰ふのちやといふことになつて居るのである。法華經を



受持し正憶念すれば、釋迦牟尼佛を見たてまつつて、釋迦牟尼佛からそれを聽いて、釋迦牟尼佛を供養して、釋迦牟尼佛に讃めて貰つて、釋迦牟尼佛に摩でて貰ふといふやうに、法華經の受持正憶念と釋迦牟尼佛の關係の密接なることは極めて明瞭なことである。その受持といふことが一偈一句だん／＼結要すれば「要中の要」として南無妙法蓮華經となつて居るのである。法華經を受持し正憶念することを纏めあげて南無妙法蓮華經と言つて居るのであるから、南無妙法蓮華經と唱ふる者は釋迦牟尼佛を見たてまつり、釋迦牟尼佛よりその聲を聽き、釋迦牟尼佛に依つて守られる者である。釋迦牟尼佛を供養し釋迦牟尼佛に依つて讃められる者である。南無妙法蓮華經と唱へて居ることが釋迦牟尼佛を供養し讃歎して居ることだといふことになつて居るのである。

### チ、經旨の歸結妙處

この事はモツと／＼詳しくお話をしなければ、この經文の意味が明かにはわからんが、この三輪の妙化を、佛が涅槃するに當つて、汝等の爲めに何時も相を現はして置くことは出來ぬから、この肉身は涅槃するけれども、その代りに法華經を留めて置く、法華經を結要したる妙法蓮華經として文字がそこに現れて居れば、この「妙法蓮華經」の文字を見る時、汝等我が釋迦牟尼佛にお眼にかゝつたと思へといふことを言はれた。この字は汝等が見ることが出来る、我が相は顛倒の衆生の爲めに隠すけれども、一世一代の妙法蓮華經は、文字として汝等の肉眼で見ることが出来る、この文字を拜する時、我れ其處に在りと思へといふことになるのである。この文字は本佛の現身の利益に代つて居るところのものであるから、法華經を受持し正憶念すれば、釋迦牟尼佛を見たてまつり、釋迦牟尼佛を供養するなりといふことを、釋尊が最後の法華經の纏りのところで仰せられて居るのである。

モウ一つは、いろ／＼説法をするのも汝等を教はんが爲めであるが、それを纏めて來れば法華經となり、法華經も南無妙法蓮華經となつて居る。その南無妙法蓮華經の聲、五字一音と申して、文字では五字、聲では一いきに南無妙法蓮華經といきを纏がすして唱へられる、その一聲の南無妙法蓮華經の聲は、我が一代五十年の説法を法華經に纏め、八年の法華經を一聲に纏めたものとして、汝が南無妙法蓮華經と唱へるその聲が耳に響いた時は、靈山會上八年の説法を拜聴した歡喜と等しい考へを其處に起せよといふことを仰せられた。妙法の五字眼に觸るゝ時釋尊の實在を憶念したてまつり、妙法の聲一音耳に響く時、御佛をここに在せりと感激をして南無妙法蓮華經と唱へよと説かれたのが法華經の正系の教義である。

そこで「南無釋迦牟尼佛」といふこと、「南無妙法蓮華經」といふこと、ごつちが善いか悪いかといふことでこれがわかれて來たのではない。釋迦如來が、自分は相を隠したといふ關係からして、我れの相に代るべきものはこの心から説き出したところの經典、これが通る、この經典の文字が眼に觸れた時佛を拜したと見よといふのである。「經典法身」といふことも、この思想が一つの根柢をなして居るのである。このお經を持つ者は即佛身を持つ者なり、法華經を大切にするのはお釋迦さまを大切にされる者である、法華經を誘るとき釋尊の精神に背き、釋尊に逆行する者である、法華經は釋尊出世本懷の御教である、尊き佛様の御慈悲、御智慧の結晶せられた尊き教であると渴仰する時、法華經を信賴する時、佛を渴仰するといふことに直ぐなつて居るのである。それは人間の生活に就て言つても、親なら親が一番大事なこと

言ひ遺して置いて呉れた、その書附がある、親は死んで妻は見えないけれども、その親の生ける心の上から出て、血と涙を絞つて言うて置いて呉れたことは是れであつたといふ、その文書を読んだ時、その父母を想ひ起し「父母そこに在せり」として、感激が湧くのであるから「俺は死んでも大事なことはこの中に書いて置いたから、是れだけは膺身はなさず持つて居れ」と親が遺言せられたならば、それは紙片のやうな物であるけれども、それがその儘親に代つて居るといふことを知らなければならぬ。又書附にすれば落すこともあるだらうけれども、「斯ういふ言葉一つを覚えて居れ」といふ。丁度、補正成がその子正行に對して言うたとするならば、お前は日本人である以上は勤王の志を忘れるなと訓誡した。だから「勤王の志」と言うた時には父が汝の側に在りと思へ、お父さんの一世一代の遺訓は「勤王の志を忘れるな」といふことであつたと想ひ起さなければならぬ。そこで言葉は汝の言葉にかはつても、父が與へた言葉の儘である、勤王の志とは汝の父正成が汝に傳へる言葉なるが故に、その言葉を唱へた時は汝の聲と思ふな、正成の肺腑をついて出た言葉として感激を新しくせよと言うて聴かせたのである。それと同じ事である。

さういふ大事な意味を忘れてしまつて、唯だ南無妙法蓮華經は風來坊みたやうに、どこへでも飛び歩くやうに考へたのは、所謂ドンドコ法華、難法華、腐れ法華と名づくるものである。そんな低級なものを以て將來人文の上に法華經の宣傳をしようなどといふことは、實に滑稽に等しいことである。それは弘まることが如く見えるけれども、そんなものは天理教や大本教が弘まることが如く見ると同じもので、これは塵芥箱に蛆が生れたり、蛆がわいたりするのと同じものである、そんなものは直ぐ死んでしまふ、何にもなら

ぬ。それで法華の弘まるお手傳ひをしますと言ひながら、譯のわからんことを言うて喜んで居るけれども、日蓮教學は高等な宗教である、如何に易い安心立命を教へても、それは世界人文の鏡を以て任じて行くのである、低きに似て低きにあらず、易きに似て易きにあらず、低きに見え易きに見えて、その奥は絶對の大教義より流れて來て居るものであるといふことを忘れてはならないのである。話が定つてしまつて愈々題目を唱える時には、唯だ簡單な「南無妙法蓮華經」である、さうしてそこに感激を持つのである。それを難かしいといふやうなことを言ふのは、譯のわからんものである、それはどんな低い宗教でも、人格の最も尊いものを意識して或る言葉を唱へて居る。これが一番易いのである、これより易いもの、難賣をする必要は少しもない、何も知らないで宜いといふことで行かうとするのは非常な間違ひである。それは日蓮聖人の遺文にも出て來るけれども、そこを分けて考へなければならぬ。法華經の教は何も知らないで宜いといふことは何處にも書いてない、一番切り詰めて考へなければならぬ。法華經の教は何も知らないで宜いといふが、いふ字である、何にしたがふのかわからんといふことで、フラ／＼不良少年が行くやうな工合に、淺草公園に迷うて居るやうでは隨喜といふことは言へない、一番善い事に見込をつけて、その方に心を隨へて行くといふことである。だから日本人で言へば、忠君愛國といふことが國民道德の生輝であるとしたならば、他の學問は知らんけれども、忠君愛國といふことにはモウ直様從順に随ひますといふことで、始めて隨喜心といふものが成立するのである。何も知らないでも宜い、譯がわからんでも宜いといふ言葉は禁物はない。併しそれが日蓮聖人の遺訓の中にも出て居るけれども、これは對宗的關係から起つたところの時代風潮の影響から來つた言葉である。

そこで經文の証據は澤山あるが、唯だ此處に在るといふことだけを御紹介して、説明は略して置きたいと思ふ。書量品の次には『分別功德品』に於て、やはりこの法華經を受持し讀誦する者の功德は、上に説きしが如く量るべからざるものであるといふことを仰せられて居る。「隨喜功德品」も根本は佛に隨喜するのであるけれども、その次に

若し講法の處に於て人を勸めて坐して經を聽かしめん。是の福の因縁を以て釋梵轉輪の座を得ん。法を講ずる場所に於て、あとから来た人に座を譲つて「此處へ腰をかけてお聴きなさい」といふことを一つ言へば、その因縁によつて帝釋天王、梵天王、轉輪聖王の座に坐することが出来る。

何に況んや一心に聽き、其の義趣を解説し、説の如く修行せんをや。人を勸めて聽かしむるさへも法華經は廣大な功德を生ずるものである、況んや自から之を受持し自から讀誦すれば更に廣大な功德を成ずるといふことになつて居る。それから「法師功德品」にもこの經を受持、讀誦することに依つて八百の眼の功德、千二百の耳の功德といふやうに、六根清淨を得ることを説かれて居る。次の「不輕品」に於ても

億億萬劫より不可議に至つて、時に乃し是の法華經を聞くことを得ん。

と言つて、法華經の値ひ難きこと、さうして法華經に値つた者は飛びつくやうに信仰をせよと言つて、この經の有難いことを説かれて居る。それはお釋迦さまを除けて言ひ居るのではない、お釋迦さまの尊い事柄がそこにあつて、前にいふ通り法華經は生ける釋迦牟尼佛なり、法華經の文字は釋尊の御身に代り、法華經の聲は釋尊の御聲に代はる意味に於て法華經が尊いのである。左様にして法華經に於ては到る處を

のことは説かれて居る、「藥王品」に於ても「神力品」に於ても「陀羅尼品」に於ても「勸發品」に於ても、法華經を受持せよといふことは頗る多く示されて居る。受持といふ言葉は廣く言へば法華經全体を受け持つことであるが、之を廣、略、要の關係に於て、廣げれば法華經一部、略すれば書量品、要を取れば每自作是念の文となり、モ一つ廣げれば書量品となり、モ一つ廣げれば法華經となり、更に廣げれば一切經となり、一切經を結要して五字に纏めたといふことである。これは法華經の到る處にさう説かれて居るし、日蓮聖人もそれに基づいて宗旨を立てられて居るのである。それ故に「神力品」に於て「四句の要法」に纏め上げて、その次には直ぐ此の經を受持、讀誦云々といふことが出て来るし、更に神力品の偈に至れば「能く此の經を持たん者は」能く此の經を保たん者は」といふことがズツと並んで居つて、その終りの所に至つても「成が滅度の後に於て應に斯の經を受持すべし」といふやうに、此の經といふことを説かれて居る。そこで南無妙法蓮華經といふ言葉が出て来るのである。「書量品」には前に言ふ通り「是好良藥」としてこの題目を留められた關係からして、お題目が出て来るのである。

左様な譯であるからして、このお經の証據では「南無釋迦牟尼佛」と唱へよとは仰せられては居ない。神力品に十方の世界から娑婆世界に向つて南無釋迦牟尼佛と唱へたといふことは在る、であるから唱へても少しも悪くはない、その御名に廣大な功德のあることは前回に申した通りの次第である。決して題目と釋迦如來の御名とは優劣を見るべきものではなくして、經文の教が唯今申したやうに、釋尊の現身にかはる場合に法華經の文字となり、釋尊の説法を結要する場合に一音の聲となつて現れて來て居るが故に、そ

れを日蓮聖人は繼がれたのである。

されば之を日蓮聖人の聖訓の方に移して、法華經の經旨より來るところの御主張といふものを見るならば、大事な御文章は皆なさうなつて居るのである。就中「觀心本尊鈔」は最もさういふ點には大切な御文章でありませんが、そこには何處に大切な意味が現はれて居るかと言へば、即ち良きお醫者さまは釋尊であつて、使となつて來るのが地涌の菩薩、上行等の菩薩である、その良業が題目である。

今の遣使還告は地涌なり、是好良業は善量品の肝要、名体宗用教の南無妙法蓮華經是なり。

(經語錄二四二頁)

と書かれたので、題目は是好良業である、前に申す良き醫者が病人を癒す爲めに與へられたところの救ひの方法である。それ故に「觀心本尊鈔」の結文には、

佛大慈悲を起して、妙法五字の袋の内に此の珠を裏みて末代幼稚の頸に懸けさしむ。

(經語錄二四二頁)

と仰せられた。佛の大慈悲の意輪を元にして、さうして妙法五字の袋の内に此の珠を裏む、佛の御功德を包んで、末代幼稚の頸に懸けさしむるといふ所に本化上行再身日蓮の活動が現はれて居るのである。根本は「佛大慈悲を起して」といふこの本佛の意輪を忘れないで題目を唱へよといふことが、本尊鈔の總結の文といつて一番終りの括りになつて居る。

その他「三大秘法鈔」であるとか、或は「報恩鈔」であるとか、「開目鈔」であるとか、それ等の御文章は皆な同じ意味に現はれて居る。どこでも「廣、略、要の中には要が中の要なり」といふ言葉をお使ひになるのである。「法華題目鈔」でも「法華取要鈔」でも「要中の要」といふことは原則としてある、その要

中の要といふことは法華經を離れないのである、今申すところの説法の關係を離れない。佛の上に飛び上るといふやうなことを考へて居るものではない。佛から救ひの爲めに説かれた説法、その一番良い所を簡單にして、法華經を聞かすとも一切經を讀ますとも、題目一つに依つて釋尊の御教を受けたと同じ利益を得ようといふことになつて居るのである、佛を離れて救はるべき題目ではない。

その意味は尙ほいろ／＼の証據に依つて研究して行く必要があるが、併し方向を與へて置きさへすれば、そこに氣がついて日蓮聖人の聖訓を見れば、御遺文の中には到る處さういふ意味が現れて居るのである。その物を衷心から尋ねない時分には、眼に觸れても氣がつかないものである、例へば別に煙草を買はうと思はない人であつたならば、淺草から上野に行くまでの間に煙草屋が何軒あるかといふことは、氣がつかずに通つてしまふけれども、自分の持つて出た煙草が無くなつてしまつて「ア、煙草が欲しいナ、どこかに賣つて居ないかナ」と思つて歩いて見ると、何軒も煙草屋のあることがわかる。腹が減つて「蕎麥が食ひたいナ」と思つて歩いて見れば、直ぐに蕎麥屋が眼に入るのであるけれども、考へずして歩いて居ると少しも眼に入らぬ。そのやうなもので今申す題目は本佛との關係に於て三輪の妙化としてあるといふことを氣づいて見ると、非常に澤山その證據があるのである。その御遺文の證據は時間の都合上一々詳細に説明することの出来ないのを甚だ遺憾とするが、その文だけを擧げて置きたいと思ふ。「五箇盆鈔」に

仰ぐ所は釋迦佛、信する法は法華經なり。(經語錄三五五頁)

これは釋迦如來と法華經との信仰關係が聯結されて居ることをいふので、仰ぐところは釋迦牟尼佛であり、信する法は法華經である。それから「富木鈔」に

佛滅後二千二百二十餘年、今に壽量品の佛と肝要の五字とは流布せず。(經語錄三五六頁)

壽量品の佛と肝要の五字を忘れては駄目である、肝要の五字だけ取つて壽量品の佛を忘れてはいかん、壽量品の佛と肝要の五字の關係を離さんやうにしなければならぬと仰せられた。又「善無畏鈔」に

佛には釋迦牟尼佛を本尊と定めぬれば自然に不孝の罪脱かれ、法華經を信じぬれば不慮に謗法の科を脱れたり。(經語錄一三三七頁)

「妙法曼陀羅鈔」に

末代の一切衆生は、何なる大醫何なる良藥を持つてか治す可きと勸がへ候へば、大日如來の智拳印並に眞言、阿彌陀如來の四十八願、藥師如來の十二の大願、衆病悉除の誓も及ぶ可からず、此等の藥をつかはす病即消滅せざる上彌倍増す可し、此等末法の時の爲め、教主釋尊多寶如來分身の諸佛を集め給うて、一つの仙藥を留め給へり。(經語錄三五八頁)

これは是好良藥の意味に於て説かれて居る。それから「垂愚問答鈔」に

嬰兒に乳をふくむるに其の味をしらすと雖も、自然に其の身を生長す、醫師が病者に藥を與ふるに病者藥の根源をしらすと雖も、服すれば任運と病愈ゆ。若し藥の源をしらすと云ふて、醫者の與ふる藥を服せずば其の病愈ゆべしや、藥を知るも知らざるも、服すれば病の愈る事以て是れ同じ。既に佛を良醫と號し、法を良藥に譬へ、衆生を病人に譬ふ。されば如來一代の教法を擔負和合して妙法一粒の良藥に九せり。(經語錄三六五頁)

「波木井鈔」に

但し佛滅後二千餘年三朝の間、數萬の寺々之れあり。然りと雖も本門の教主の寺塔と、地涌千界の菩薩の別に授與せられし所の妙法蓮華經の五字、未だ之を弘通せず。(經語錄三八三頁)

本佛を祭つて居る寺はない、さうしてお題目を唱へることを知らないと言はれて居る。それから「一代大意鈔」に

妙とは最勝修多羅甘露門なり。(經語錄二二二頁)

如何に「妙法」といつてもこれはお經である、お經を飛び越してその外にある真理とか何とかいふものではない、釋尊の御說法の中を一番よき說法といふことを「妙法」と申すのであるといはれた。それから「報恩鈔」に

阿含經の題目には大旨一切はあるやうなれども、但小釋迦一佛ありて他佛なし。華嚴經、觀經、大日經等には又一切有るやうなれども、二乗を佛になすやうと久遠實成の釋迦佛なし。(經語錄一九九頁)

題目を唱へて居るその内容は何かと言つたならば法華經であること故に、二乗作佛と久遠實成が題目の内容であつて、久遠實成の本佛を有難がり、我等に佛性があるといふことを有難がる觀念を除つてしまつては、題目は空虛であると書かれて居る。それから「探時鈔」に

例せば神力品の十神力の時、十方世界の一切衆生一人もなく、娑婆世界に向つて大音聲をはなちて、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と一同に叫びしが如し。(經語錄二一九四頁)

「南無釋迦牟尼佛」と唱へてもよいのであるが、それは「南無妙法蓮華經」と言つても同じ事であると言つ

て、「南無釋迦牟尼佛、南無妙法蓮華經」と續いて兩方を仰せられて居る。

以上はホンの僅かの部分を擧げたのであるが、日蓮聖人のお考への中では、お釋迦さまと題目といふものは何時もちやんと引ついで居るのである。それは殊に女の人などに就いては日蓮聖人が斯ういふことを仰せられて居る。「松野殿女房御書」に

心なき女人の身には佛住み給はず、法華經を持つ女人は澄める水の如し、釋迦佛の月宿らせ給ふ。譬へば女人の懐み始めたるには吾身には覺えねども、月漸く重なり日も屢々過ぐれば、初にはさかと疑ひ、後には一定と思ふ。心ある女人は男子をんなをも知るなり。法華經の法門も亦かくの如し、南無妙法蓮華經と心に信じぬれば、心を宿として釋迦佛懷まれ給ふ。(編語録 四一六頁)

南無妙法蓮華經と一度唱へると、お釋迦さまがズツと心の中に入つて来て下さる。恰かも女が懐妊した始めにははつきり自分ではわからんけれども、日が経つて来るといふと子供がお腹の中で動き出す、さうして男か女かといふことも略々考へつくが如くに、はつきり自分に妊娠をしたといふことがわかる。題目を唱へ始めた最初にはわからんけれども、信心が進めば釋迦牟尼佛が題目の内容である、吾が信するものは釋迦牟尼佛であるといふことがはつきりわかると言はれて居る。然るに如何に經驗のない婦人でも、五ヶ月か六ヶ月経てば妊娠をしたといふことがはつきりするだらうが、今の法華の坊さんや信者は、何十年経つても、何百年経つても、題目を唱へてそれがお釋迦さまとの關係がわからないで、狸が妊娠したり狐が妊娠したりするに至つては、如何にも可哀さうな者と言はなければならぬのである。題目を唱へる以上は本佛釋尊が吾が心の中に宿らせ給ふといふのは、モウ歩々念々本佛を離れない精神になることを申すのである。

この松野殿女房御書の如き意味合ひを最も力強く研究して行かなければならんと思ふ。その他題目を唱へる以上は佛が心に入り代はるといふやうな御文章は澤山ある。「阿責謗法鈔」に

案に相違して日蓮よりも強盛の御志ごもありと聞え候、偏へに只事にあらず、教主釋尊の各々の御心に入り替らせ給ふ歎と思へば、感涙おさへ難し。(編語録 四一七頁)

と書かれ、その他類文は枚擧に遑あらざるほどである。

さうして日蓮聖人の心理状態はさうであるかといふと、人間は大事な時に信仰の偽らざるものが現はれて来るものである、日蓮聖人が龍の口の頸の座に坐つて、將に頸刻ねられんとした時に、口には南無妙法蓮華經を唱へたけれども、頭腦の中にさういふことを考へたか、後にその時の感想を述べられて、

慈父大覺世尊代らせ給ふ。

やさしいお父さんのお釋迦さまが、日蓮の頭に代つて日蓮をお助け下さつたのであるかといふことを申し居る。愈々の時には人は親を慕ふものである、平常は忘れて居つても娘が悪漢に捕へられたといふ時には、必ず「お母さん助けて下さい」といふのである、腹の奥にある一番大事に思つて居るものが出て来る。秋水三尺頭に臨んだ時、日蓮が頭腦に浮んだものは慈父大覺世尊といふことであつたのである。又佐渡ヶ嶋に於て雪の中に凍え死なんとし、敵意を持つ者は暗殺をせんとする所に於て彼はさう言つて居るか。「顯佛未來記」には

今年今月萬が一にも身命を脱がれ難きか。世の人疑ひあらば委細の事は弟子に之を問へ。

最早や今年今月は逆も日蓮は助からない、今まで段々反對の形勢が押寄せて来て、或は庵室の燒討となり、或は龍の口の法難となり、幾度か死地に陥ちて、幸に生命を保つた、今度佐渡ヶ嶋に來てからも危ないこととは度々あつた、それも今日までは免れて來たけれども、最早や今年今月は萬が一にも身命脱れ難しであるから、今後法門の事を聴きたいと思つても、日蓮はモウこの世に居らない。併し弟子達に教へて置いたから、この次からは法門の事を弟子に聴けよ、今度手紙が來る時分には日蓮は最早や現世の人でないといふことを書かれた、實に感激の多い文章である。その次の言葉が何となつて居るか「弟子に之を問へ」と言つた直ぐ次に

幸ひなる哉、一生の内に無始の謗法を消滅せんことよ。悦ばしい哉未だ見聞せざる教主釋尊に侍り奉らんことよ。(聖語錄四三二頁)

バツと頸を切られたら、日頃お慕ひ申して居るお釋迦さまの所に行くのであるから、何も嘆くことはないと言はれた。日蓮聖人の御心がお釋迦さまと離れなかつたといふことは、モウあらゆる點に於て明かである。かねて私が『聖訓要義』及び『聖訓摘要』に於て連續的に講述した際に、聖人の御遺文中より残らずその點は抽出して置いたから、私が死んでもその事は明かになつて居る。餘り多過ぎる位さういふ御文章があるのである。

又形の方に於ても松葉ヶ谷に於て永らく御弘通をなされた、松葉ヶ谷の法華堂といふものは、何を本尊にして居られたかと言へば。

小庵には釋尊を本尊とし一切經を安置したり。(聖語錄一三六四頁)

と『神國王書』にお書きになつて居る。これに松葉ヶ谷燒討の光景をお書きになつたのであるが、この松葉ヶ谷の草庵に小幡房が暴れ込んだ場合も、龍の口の法難の場合も彼等が聖人の庵室に闖入つて打ち碎いたのは、釋迦牟尼佛の木像を毀棄し、法華經を引裂いたのである。そこで「小庵には釋尊を本尊とし」と書かれた。それから引續いて佐渡にお出でになつて前後四箇年、塚原三味堂一間四面の辻堂の隅に三角の標を釣つて、其處に安置されたのは何であるかと言へばやはり釋尊の尊像であつたのである、その事も佐渡の御文章には屢々仰せられて居る。

我が根本より持ちまいらせて候、教主釋尊を立てまいらせ、法華經を手ににぎり、鉢をさし

て居たりしかども、人もみえず、食もあたへずして四箇年なり。(聖語錄一七九〇頁)

と『妙法尼鈔』に仰せられて居る。根本から……流される時にも一番大事と思つて持つて行つたのはお釋迦さまの尊像であつた、何も外には置いてはないがそれ一つ安置してあつたのである。身延にお入りになつても掌ばかりの所に草庵をお造りになつて、その身延に御安着の後第一に線香をお立てになつたのは釋尊の尊像一体である。今の人のやうに唯だお曼陀羅が有難い——といつて釋尊を忘れて、いろ／＼のものが澤山書いてあるから一パイ何でもあるといふやうなことを言ふのは、これは眞言系統の思想である。斯くして題目を邪魔にするといふことは無論間違つて居るし、お題目が釋迦よりえらいと考へるのも間違つて居ることが略ぼわかつて來た譯である。

尙ほこれに就てはどうしても他の宗旨の影響から來る對宗よりの傍系に就て、今少し申上げなければ間違ひがはつきりして來ない。今の誤まれる日蓮教徒に附隨して居る弊害は、日蓮聖人の御遺文の軽い所

から出て来る佐渡以前の法門、或は他の宗旨に對して起る教から絡みからんで出て来るのである。御遺文の中にも「何も知らなくても宜い」といふやうなことを仰しやつて居る所もあるが、その反對に「何も知らないで唱へる題目は役に立たぬ」と仰しやつた所もある。唯だお題目さへ唱へたら閻魔王の御前で「日蓮が弟子檀那と名乗つて通らせ給ふべし」と言つたかと思ふと、日蓮が判を持たざらん者はよも御用いあるまじ」如何に口にはかり題目を唱へても、愈々眞物が偽物か検査をするといふことになつたならば、ちよつとまごつくだらう。その検査をされても眞に日蓮の弟子檀那ぢやとして通過の出来る者は、やはり日蓮の教を眞ッ直に會得して居らなければ答辯も出来まい、「唯だお題目だけ眞似をしました」といふのでは、閻魔王の法廷は通過は出来ぬぞといふことをお書きになつて居る。又信心が薄ければ假令題目を唱へても地獄に墜ちるといふ事も言はれて居る、それは「聖立正意鈔」に

但だ名のみ之を假つて心中に染みざる信心薄き者は、設ひ千劫をば經されども或は一無間、或は二無間、乃至十百無間疑ひなからんものか。(論道一〇七五頁)

假令口に題目を唱へても、法華經の精神に反したる者は無間地獄に眞ッ逆さまに行くと仰せられた。假令信心伏隨從すると雖も、而も教の精神に反いたる者は、天の雨の大地に落ち、蜂の石の谷へ轉ふと思召せ、大阿鼻獄疑ひあるべからず」コロコロと地獄に行つてしまふ、「其時日蓮はしうらみさせ給ふな」とも言はれて居る。その苦い方の聖訓を心得て能く守るのが本當の信者である、甘やかされる方のどうでも宜しい心得などは無くとも宜しい。「一期生に一遍唱へただけでも宜しい」といふやうなことを頼りにして行くのは、これは本當の教でもなく信者でもないといふことを明かにして、さうして嚴意なる日蓮の信徒となら

んければならぬと思ふ。

それには「對宗よりの傍系」に就て更に詳しくお話をしなければ、この永い間多くの人を迷はした間違ひを明かにすることが出来ないと思ふから、今日は「經旨よりの正系」としての理證、經證を明かにしたので、更に次回には「對宗よりの傍系」に屬する教義に就て、その誤解の起る所以、それから正系と傍系との關係等を對照して、鮮明なる意識信仰を發揮したいと思ふ。

# 大僧正 本多日生師著 本尊論

次 目

一、緒言：二、宗教と本尊：三、諸種の本尊觀：四、本尊と真理：五、本尊と倫理：六、本尊と救濟：七、佛教の本尊觀：八、佛教の三寶觀：九、佛身觀の要旨：一〇、滅後信仰の概觀：一一、佛教本尊の三方面の考察：一二、法華經に顯はれたる本尊：一三、遺文に顯はれたる本尊：一四、本尊の勸請文：一五、本尊勸請の實例：一六、遺文の會通：一七、異論の解決：一八、結論

定價 紙裝一部 金五十錢 送料金四錢  
布裝一部 金七十錢

發行所 立正結社

賣捌所 名古屋市東區田代町常樂寺内 統編輯局

振替名古屋一〇八一九番



# 信行の基調を説ける觀普賢經

(第四回)

## 此經の五支

井村日威

天台智者大師は經文を釋するに先づ五重支義を明して其大要を示された。第一に經の名を釋し、第二に經の體を辨じ、第三に經の宗を明し、第四に經の用を辨じ、第五に教を判するのである。今此に基いて今經の五支を明かさば第一に經の名を釋す、「佛說觀普賢菩薩行法經」の十字の中に、「佛」とは梵語の「佛陀」の略稱であつて、翻譯すると覺者と云ふ自覺、覺他、覺滿の三徳を具する者を佛陀と云ふので、凡夫は自覺しない、聲聞・覺の二乘は化他の行が充分でない故に覺他の徳がない、菩薩は自行化他共に他に勝れては居るが未だ完全でない故覺滿とは言へない、佛陀は凡夫二乘菩薩に異なつて居るが故

に「覺者」と言ふ、今此經に言ふ所の佛陀とは三界の大導師教主釋迦牟尼佛を指して言ふのである。「説」とは四辯八音を以つて無上の大乘を宣暢し給ふを言ふので、今經は釋迦牟尼佛の所説なりと云ふことである。「觀、普賢菩薩行法」の七字の意味に就ては前二回に亘つて此經所説の大要を申上げた中にお晰致した故に此には略して置きますが、普賢菩薩のお名前大を解釋致して置ませう、普賢とは梵語には殊輪跋陀或は三曼跋陀と云ふ、大論には徧吉と翻譯がしてあるが、此は普賢と同じ意味で、徧と普とはどちらも「あまねし」と云ふ字義もあり、吉と賢と同じ字義であるから、此翻譯は字は異つても意味は同じである、衆伏の頂に居して伏道周遍するが故

に普と名づけ兩道の終に在つて殘惑微微なるが故に賢と稱す、煩惱を伏し將に斷盡せんとして極邊が丈残つて居る位にある人である故に普賢と稱したのであると云ふのである、菩薩とは詳しく言へば菩提摩訶薩詞薩埵で、大道心衆生と翻譯する、大道心とは上求菩提下化衆生の大道心の人なれば斯く言ふたのである、我々凡夫は眼前の利に眼眩み、自我の爲に計る事のみ考へて居るから到底大道心のものとは言ふことは出来ぬ「經」とは梵語には修多羅と云ふ、佛陀の所説を言ふので、教行理の軌るべきの法なるが故に經と云ふ、此娑婆世界の衆生は三塵を經と爲すと云ふて、第一には聲塵を用て經と爲す、佛の在世の如く金口の演說聲音を以て其要を説き聞者は得道するのである。

第二には色塵を以て經と爲す、佛滅後に於て紙墨を以て佛陀の所説を傳持するのである、紙墨の經卷の中に佛陀の証悟を傳へらるゝのである、第三には

法塵を用ゐて經を爲す、紙墨の經卷に依らず音聲に依らずして、諸法を觀察し心に曉悟するものである、此は觀念系統に屬する人の証悟を言ふのである、今此處では第二色塵の紙墨の經卷であり、而も其内容は聲塵の佛陀の御音に依るものなるが故に佛説——經と佛説の二字を冠しめたのである。

第二に經の體を辨せば方等實相の妙理を以て經の體と爲す、經中處々に方等大乘經と稱す、方等は大乘經の通名にして、一實相を以て經の正體と爲して居る、小乘には三法印と稱し大乘に一實相印と稱して實相妙理を其教義の根柢に置くことは大乘諸經に通有したるものである。

第三に經の宗を明さば、因果を宗とす、此經は行人六根懺悔を修して(因)父母所生の肉身をして清淨法身と爲さしむる(果)のである、第四に經の用を辨せば、斷疑生信を以つて經の力用と爲す、行者無始の罪障を懺悔するに其罪消滅して親たり生身

の普賢菩薩を見、次で諸佛を見奉ることを得、此即ち此經の勝用である、第五に教相を論せば無上の醍醐の教にして未來惡世の衆生を利益せんが爲に説き給ふた經文である、已上略して此經の五重玄義を明したのである。

### 此經の科段

普通經典解釋の場合には先づ序正流通の三段に分ち、更に其中に分科を試みるが一般の事となつては居り、今經にも相當複雑な科段が作られてありますが、それを一々擧げて經文を解釋して行くことは徒らに煩雜になり、且つ此經文には前後重複の處もあるので省略して差支なき處も多分にある様に考へらる、故、今は必要な處丈を簡條書の様に表示して必要な經文丈に就てお喩を致して見やうと考へて居りますから、大體お喩をする要點を左に列擧して置かうと思ふ。

- 一、序分 全四七五、二行  
 二、佛涅槃を告ぐ 全四七五、三  
 三、三大士疑問を發す 全四七五、六  
 四、如來説くことを行す 全四七六、三  
 五、正しく前問に答ふ 全四七六、九  
 六、行人に利鈍あるを明す 全四七七、六  
 七、普賢の依報を見るを明す 全四七七、九  
 八、普賢の眞身を見るを明す 全四八〇、九  
 九、行人の禮佛讚法を明す 全四八〇、六  
 一〇、禮佛悔力の故に普賢を見る 全四八二、三  
 一一、普賢説法力の故に諸佛を見る 全四八三、八  
 一二、行者更に禮佛懺悔す 全四八四、六  
 一三、略して六根懺悔を明す 全四八六、三  
 一四、夢中に六根清淨を得 全四八六、八  
 一五、諸佛行者を讚歎す 全四八七、五  
 一六、廣く十方の諸佛を見る 全四八八、五  
 一七、夢中に靈山の説法を見る 全四九〇、二  
 一八、悟中に釋迦佛を見る 全四九〇、六  
 一九、釋迦の分身來集を見る 全四九一、一  
 二〇、行者宿命通を得 全四九一、九

- 一一、諸菩薩六念の法を説く 全四九二、八  
 一二、眼根懺悔の法を明す 全四九三、三  
 一三、眼根悔力の故に多寶塔を見る 全四九五、五  
 一四、耳根懺悔の法を明す 全四九六、八  
 一五、耳根悔力の故に多寶佛及分身を見る 全四九八、三  
 一六、鼻根懺悔の法を明す 全四九八、九  
 一七、舌根懺悔の法を明す 全五〇〇、三  
 一八、諸佛行者の爲に説法す 全五〇〇、三  
 一九、身心二根の悔法を明す 全五〇二、六  
 二〇、懺悔を行すの處を明す 全五〇三、三  
 二一、廣く甚深大懺悔の法を説く 全五〇四、二  
 二二、諸佛行者の爲に無相の法を説く 全五〇五、二  
 二三、此經は諸佛の三種の身を生ず 全五〇五、六  
 二四、六根の滅惡生善を明す 全五〇六、四  
 二五、大乘力の故に室の加被を明す 全五〇七、九  
 二六、昔の果証を擧げて念誦を勸む 全五〇八、九  
 二七、滅後の行者の滅罪福生を明す 全五〇九、五  
 二八、戒を受せん欲せば禮佛懺悔せよ 全五二〇、六  
 二九、三師一証一件を明す 全五二〇、九

四〇、三歸依を明す 全五二、九  
 四一、大乘の力能く勝法を生ず 全五二、六  
 四二、大乘の力能く惡法を滅す 全五三、二  
 四三、王者大臣等の失惡を明す 全五四、三  
 四四、刹利居士等懺悔の法を明す 全五四、七  
 四五、此法を持つ者の得益を明す 全五五、八  
 以上四十五項目の中一、二、三は序分で最後の一が流通分、四より四四までが正宗分であつて、七より一二に至るまでが「觀普賢」の三字を説き一三より二三迄が行法即ち六根懺悔の法を詳説したもので三三以下は如來の滅後に於て此經に依つて行するもの、功德を説き、此經を信受すべきを勧められたのである、故に三三以下を流通分と見ても差支は無いと思はる、本文の解釋は前各項の夫々に就て要文を抽出して成るべく簡明にお喩を致さうと思ふ、次回よりは本文に就てお喩を致します。

# すゝみゆくみち

原 口 晃

人格の人、日本車輛會社取締役、原口晃先生が同社社員及従業員等の爲に執筆されし玉稿を頂戴して御紹介します。(記者)

## 一、人間の幸福は斯くして恵まる

人生五十年といふも、仔細に觀じれば、一瞬の積み重なつたものに過ぎぬ。一刻一呼吸毎に、進み行く時の集り、これがやがて、人間の一生進といふ永き日を繰り出す。

時の流れは、斯くして果てしなく續く、始めなきの始のより、終りなきの終りまで、無限に、悠久に、只音もなく、靜に流れ來り、又流れ去る、その一瞬一刻を、正しく生活してゆくと同時に、人間の幸福は恵まれて来る。

## 二、私の信条

私は常に、この信念の下に働いて居る。

## 三、見 利 思 義

それで曩には見利思義の語を扁額に仕立て、事務所の壁に高く掲げた、商賣は正しくしてゆきませうといふの意に外ならぬ。只營業である限り、商賣である限り、利益を忘れることは出來ぬ、さりながら、その利益は常に正しきものでなければならぬ、我も人も共に利し、以て吾々の正しき生活の理想に一致するものでなければならぬ、これが、やがて、顧客に信用を得る所以であり、吾々の仕事は直ちに、社會國家の生命に觸れる所以であり、自然に、吾々の會社自身の生命を永久に生かす所以である。決算期毎に、如何に有利なる數字が、その營業の成績に現はれても、經營の任にある人より、庭に草生る人の頭にまで、この職業に對し、會社に對する一の信念が、貫き流れざる限りは、その事業は、恰

五尺の肉體、五十年の生涯、若しもこれを只一人だけ、多くの人の中より切り離して、無人の孤島に置いたならば、そこに人間の生活があり、幸福がありと言ひ得られようか。人は人と共に生きてゆくと同時に、人間の生活がある。この人と人との繋がり、そこに社會が生れて来る、人と共に生きてゆくところに、人間の生命がある。所謂共存共榮、これが人間生活の根本である、中心でなければならぬ。幾千年の昔から、無數の人々が、この觀念に立脚し、相倚り相助けて、自然に脈絡相通じ、縦に横に相繋ぎ、相連なりて、建設し來たのが、現代の社會であり、國家である、斯くて、現在より將來に、永遠に、無窮に、相連續し、相關聯し、以て人間生活の完成を期せんとするところに、人生の意義がある。私は實に斯く信じて居る、諸君と共に、この信条を以て進みたいと思つて居る、諸君と相識り、この會社の小天地に立籠りて、相親しむこと茲に六年、

も根の無き床の生花に似て、或る期間を過ぐれば、遂に凋落の運命を免るゝことは出來ぬ。

然るに、兎角商賣は、懸引して儲けるものなりといふ考へを以て、萬事を律せんとする思想が、今尙跋扈して、世を毒することが少なくない、吾々はこの時代後れの思想より脱却して、吾々の仕事に、社會的の意義を有たしめ、國家的の意義を有たしめ、以て吾々の生活が、一歩一歩、人生の理想に到達せんことを、目標として進まねばならぬ。

## 四、一滴の水も金なり

されど、これは一片の理想である、これを具体化せねばならぬ、それで私は更に、一滴の水も金なりの語を、木札に認めて、人の出入多き會社の手洗所の壁にこれを掲げた。

一片の木の塊の鐵

- 一 滴の油
- 一 尺の繩
- 一 本の筆
- 一 枚の紙

尙これを始末にせよ、その一片、その一本にも悉く經濟上の価値を有たしめよ、これが、やがて、製品を廉くし、會社の利益を確實にする所以であり、顧客を益する所以である、一滴の水も集まりて、河となり、海となる、微細の材料と雖、積もれば山を成し、顧客の利害に影響し、會社の損益に關はること至大なるを以て、日々使用する凡ての材料は勿論、時間も亦これを空費せず、何處までも、吾々の仕事に、吾々の生活に、意義を有たしめたいといふのが、この一語を掲げ出した所以であつた。

特にこれを手洗所に掲げしは、その水道栓より、水を出し放し置く人の多きを認め、手を洗ひながら、水道の栓を開け放し置くのは、やがて會社の仕事も、

亦尻括りを堅くせざる價の人なるべし、斯の如き人は、遂に會社の仕事に、大穴を明ける人なれば、その危険性を矯めしめんとの用意であつた。

### 五、これからの目標

思ふことは頗る多く、爲さざるべからざることは無數である、然れども、一舉にしてこれを完成せんことは、人間の能力の及ぶ所にあらず、しかも急げば却て、石上種子を蒔くの愚に陥る。いでや更に左に掲ぐる事項を目標として、徐ろに人生向上の道程を辿らん。

- 一、親切 不親切は遂に顧客を失ふ
- 二、確實 不確實は信用を失ふ
- 三、敏活 敏活ならざれば機を失ふ
- 四、改善 進歩なきものは亡ぶ
- 五、勤儉 怠惰と冗費は身を亡ぼす
- 六、協力 和合一致は幸福の母なり

斯くて、一步一步進みゆくところに、吾々はその奥へられたる職業の上に、自然に己れの正しき姿を認め、純真なる人間の美しき笑ひ聲を發することが

大僧正 本多日生師著

## 修法勤行の心得

- 目次
- 一、緒言……二、法華修行の目的……三、法華修行の作法……
  - イ、勸請……ロ、修法……ハ、祈願文……ニ、回向文……ホ、受持文……

定價 一部 金十五錢 送料二錢  
拾五部 特價金一圓(送料共)

笹川日堂撰

## 顯本宗年鑑

發行所

名古屋市東區田代町常樂寺

統編輯局

振替名古屋一〇八一九

出来るであらう。地上の平和は、始めて此處に現はれ、人間の生活は、始めて此處に、最高の光を放ち、無限の幸福は、此處より生れ出て来る。

大僧正 本多日生師著

## 宗教の五綱に就て

定價 一部 金拾五錢 送料金二錢  
拾五部 特價金一圓(送料共)

大僧正 本多日生師撰

## 法華經要文

布裝一部 金五十錢 送料二錢  
改訂再版全文四號  
總編輯名付

立正結社東京支部の爲に印刷されたもの、希望者に實費にて頒與す

一部 金三十錢 送料二錢



七つの癡

長谷川義一

その晩に、お金を入れて、穴庫に隠して置きました。晩になると、煙と床を上げて、穴庫に這入つては、お金を出して見て「ナア、蓄つた〜、嬉しいなあ、こつしてあげば、誰にも、分りつこない」と云つて大安心を致しました。

二

吝兵衛さんは、永い間、一生懸命に、吝にして、お金を蓄めました、到頭、お金の這入つた癡が、七つになりました、さうなる、嬉しくつて〜たまりません。

然し、人は、業も事ばかり、續くものではありませんが、必す、苦しい事もあるものです。ある時、吝兵衛さんは、ふとした事から、風邪を引きました、始めは、大した事はないと思つて、我慢をしてをりましたが、段々病が進んで、重い〜病氣になつてしまひました。

けれども、吝兵衛さんは、お医者様にか、

ぞ、何とかして、うまく繕つて置く工夫はないものかしら〜  
今なら、銀行に預ければよいのですが昔の事として銀行等はありません、色々考へた末に、お金を裏に入れて、穴庫に隠つて置く事に決まりました。

それから、人の寝静まつた夜中に煙を上げ、床を割いて、煙の下に、穴庫を造り始めました、晝間は、煙かればなりません、又人に見られては、怪しまれますから、夜になると、穴庫を覗くのです、三晩ばかりで、一圓四方位の穴庫が出来上りました。

それから今度は、癡を買つて参りました、

ある所に、大變に吝ん坊な人が住んで居りました、食べる物も食べず、着る物も着ないといふ位に吝でありました、ですから出すものなら、舌を出すのさへも嫌でありましたその人の名前を、吝兵衛と申します。

吝兵衛さんの唯一つの楽しみは、お金を蓄める事でありました、毎日一生懸命に働いて、さうして吝にしては、お金を蓄め晩になると、お金を出して、今日はこれだけ蓄つたと云つては、嬉りで喜んでをりました。

ある時、吝兵衛さんが、  
「こつ澤山お金が蓄つては、盜坊に取られる

夫の時に、あの金を、善い事に使へばよかつたナア、けれど、今はもう駄目だ、誰か、あのお金を、見付け出して、善い事に、使つて呉れる者は、ないかナア  
と今迄の自分が、吝であつた事は、くだらない事であつたと、考へ直した時には、吝兵衛さんは、息を引き取り、死んでしまひました。

三

吝兵衛さんには、お神さんも、子供もありません、又親類もありません、水よりも冷たい吝兵衛さんの亡骸は、近所の親切な人々が集つて、お互に、お金を出し合つて、形ばかりのお葬式をしてやりました。

其後、吝兵衛さんの家に、住まうとする人は、一人もありません、その家は、お金を懸けて、直した事等はありません、だから、雨は漏ります、月は、うまきはまりません、壁は、落ちてをります、柱は、曲つてをります

四

この化物屋敷の噂を聞いて、  
「化者が出るとは、不届である、身兵が、退治してくれん」

と云ふので、夜になつて、吝兵衛の家に、出掛けました、家の中は、塵は積り、加に、蜘蛛の巣だらけであります。

りません、か、れば、お金が必要ですからです、今では、復せ致へて、もう骨が露骨になつて、瘦る事が向來ない程、骨と皮ばかりになつて、毎日〜〜喚つてをりますが、それでも、お医者様に、診て貰はうとは致しません。

「リン〜、ア、苦しい〜」と流石の吝兵衛さんも、  
「コリヤ、もう助からない」と思ひました。

何んなに、悪い人でも、死ぬ少し前には、善い心が、湧いて出るものであります、吝兵衛さんは、悪い人ではありません、唯あんなり、吝ん坊なのです、命も、今日か、明日かとなつた時に、

「ア、あの裏の中の金だ、俺が死んでも、あの金は、持つて行けない、あつて置けば、誰も知らない、俺は、吝にして、着る物も着ないで、見る物も見ないで、蓄めた金だが、穴庫に隠つて置いたきりでは、溝の中に棄てたと同じだ、ア、惡かつた、もつと丈

「ナツ、汚ない家であるワイ、鼻高天狗之助、参せり、早や、化物見参〜」と叫ばりました、草木も眠る真夜中に、血風、さい風が、スカーと吹いてきました、天狗之助は、鼻が利きますから、「サム〜さい風だ、愈々出るな」と思つてゐる内に、提灯の火は、フツと消へました「アツアツアア〜と大開口が由ます、我ら開口を、堪へても高ます、ゴイヤ、眠くなつたワイ、アツアツアア〜と段々に、眠りは増して参ります、遂に、グ〜と高鳴を聞いて、寝轉んでしまひました。すると、何處からともなく、白い、さうして大きな手が出て、天狗之助の鼻を、もぎ取つてしまひましたが、天狗之助は少しも其を知りませんでした。其内に、夜が明けました。

「アツアツアア、夜が明けたか、何んのこつた、化物なんか、出やせんぞ、馬鹿にしとる、どれ歸宅しようか」と家に歸る途中に、向ふよりお友達が、三四人参ります、友達

「アツアツアア、夜が明けたか、何んのこつた、化物なんか、出やせんぞ、どれ歸宅し

ようか」と家に歸りました。

「お友達は、耳長の儀、委を見て、耳長が歸るぞ、昨夜は化物を退治したか、ナアニ又鼻でも、取られたらう、皆で耳長待て、ヨ〜と大きな聲で呼んでも、耳長は、すましてド〜／＼行きますから、追走けて行つて、肩をた、くと、耳長は「オヤ、お早う、如何したんだ、何か用か」と言つてもないものだ、先相から、皆で、あれ程呼ぶのが、聞へないのか」「聞へないや、一体、君達は、聲が小さいナア、お友達は、耳長の顔を、よく見ると、耳の無いのが分りましたから、小さな聲で、「オイヤ、耳長は耳が無いぞ」と言つたから、聞へないのだ、今度、大きな聲で、耳長が昨夜は如何したか、化物は高んよ、鼻高天狗之助とは、腕が違ふからナア、馬鹿を云へ、貴公の耳は、如何したんだ」と云はれて耳長が、始めて手を耳にやると無いから「オヤ、耳が無い、困つたナア、どうりで鼻が聞へないと思つた」と氣まがりで悪いので

は「オイヤ、向ふから鼻高が来るぞ、昨夜、化物退治に行つたか、如何したか、ナア、何處へ退治して、鼻高々だ、オイヤ、おかしいで、鼻高の鼻が無いや、何にも、〜分つたよ、化物に、鼻を取られて、歸つて来るのだナア」と笑ひながら、談し合つてゐる内に、鼻高天狗之助と出合ひました「化物は、退治したか、ナア、オヤ、化物は、到底光に透れて出んのぢや、何處へやら行つて、鼻高が、どうりて、鼻が鼻にかゝると思つた、今迄の元氣は何處へやら行つて、氣まがりで悪いので、手で鼻を隠し、走つて歸りました、後見送つた友達に、おかしくもあり、又氣の毒でもありません。

「アツアツアア、夜が明けたか、何んのこつた、化物なんか、出やせんぞ、どれ歸宅し

五

六

「わしは、人には恨みはない、わしが、吝嗇になるには、譯があるんだヨ」  
「何んだ、譯がある、聞いてやらう、早く申せ」

「わしは、生きて居る時分に、吝嗇にして金をドクテリ蓄め込んだ、けれども、其金を、善い事に使ふ事を知らなかつた、善い事に使なうと思つた時は、もう遅くて死んでしまつただから其金を、世の中に出し度いだ」

「其は、善い、心掛だ」  
「だから、御意になつて、其金を善い事に使つて呉れる人の来るのを待つてゐるんです、貴様の様な偉い御方の来るのを、随分待ちましたよ、わしは、貴様を見込んで、御願ひが御座います、如何か其金を、貴様に差し上げますから、善い事に、使つて下さい、御願ひです」

「よいとも、御前の願ひは、きいてやるよ、の、一心齋が、成度、御前の満足する様な、立派な仕事に、其金を使つてやるから

安心なしな、しかし、金の在所を、知らせて貰ひたいナ」

其處で各兵衛の團圓は、穴庫を敷へ、十つの賽を、一心齋正義に譲り、した、團圓も自分の思ひが、ナツトの事で叶ひましたので其儘姿は、消へてしまひました。

其夜はガラリと明けました、一心齋は、直橋、大工と相談をして、各兵衛さんの家を取り壊し、跡に立派なお寺を建て、さうして偉い坊さんを迎へました。其から改めて、各兵衛さんの爲に、大勢の人を集めて、御経を上げてやりました。

其日からは毎日、このお寺は、御釋尊様の御説になつた、澤山の御経の内、一番貴い御経である、法華經の教を弘めました。各兵衛さんの團圓は、もう出ません、佛様になつたのであります。(なはり)

統一團社會部では昨年五月 天皇陛下の銀語式を記念する爲に統一慈善園(日曜學校)を設けました、本多總裁殿下御指導のもと

に堀水顯正、中村藤吉、早川大吉、高橋辰次、川原藤子、伊藤菊子、中島末子、厚木秀子、大多和とい子の諸氏が御力下さいます、私も微力ながら末席を汚して居ります、この童話も慈善園にて致したものです、兒童教化も意義ある事で御座います、同志の方々の内で童話等もありましたら統一團まで御手数ながら御送附を御願ひします、お互に連絡をとつて進みたいものです。

皇孫殿下御命名式の日  
いや榮ゆるこの芽日度さを春ほさぬ  
今日をかしこし御名降ぎつ  
日蓮上人小松原御法難を御追憶して  
くる雲の幾重流るも大空に  
そびゆる山は雄々しかりけれ。  
古谷孫右衛門

### 聖訓を拜讀して

藤原幸八

比翼と申す鳥は身一つにて頭二つあり、二つの口より入る物一身を養ふ。比目と申す魚は一目づゝある故に、一生が間離るゝことなし。夫と妻とは是の如し。

八千代生命保險會社が、嘗て保險の宣傳標語を懸賞で募集して、新聞紙上にその當選發表をした時、「夫婦と保險は八千代に契る」といふのが一等で當籤してゐたが、私は頗る之が氣に入つた。保險のことは姑く別として、夫婦關係を八千代に契ると云つたのは、頗るいゝ言葉である。新人と云ふ氣の狂つた一派の手合は、夫婦間に戀愛のある間は同棲し、戀愛が無くなれば離婚して、戀の對照を次から次へと替へてゆくと言ふのであるが、そんな馬鹿氣た事が

行はれるものでない。苟くも偕老同穴の契を結んだ夫婦間は、夫だの妻だのと云ふ隔を無くして、兩體一身異體同心、苦樂喜憂を俱になめ合つて、生々世々、千代八千代、妻は夫を、夫は妻を、互に相愛してゆきたいものである、「夫と妻とは是の如し」の聖語を色讀してゆきたいものである、其處に夫婦關係の妙味があると思ふ。

また之を、單に夫婦間に於てのみでなく、親子兄弟等一家族に於ても、同じ法の園に於る同信同行のお互間にも、戮力協心和衷協同、異體同心水魚の思をなし、苦樂を共にし喜憂を俱にして、信心修行を勵みたいものである。日蓮聖人は、四條金吾に「設ひ殿の罪深くして地獄に入り給はゞ、日蓮を如何に佛になさんと釋迦佛誘はさせ給ふとも、用ひ参らせ候べからず、同じく地獄なるべし」と仰せられた。この御言葉を頂戴した金吾は、如何の感じがしたであらうか。恐らく感激の餘り、感極まつて感涙にむ

せび、何とも言ひ得なかつたであらう。只自己の一切を聖祖の御前に捧げて以て些しも惜む所はなかつたであらう。否まだそれでも物足りない感じがしたであらう。斯く仰つた日蓮聖人はもとより偉大であるが、聖人をしてかく言はしめた四條金吾も、亦偉大ではなからうか。私共はもとより凡俗である。

凡俗の私共に非凡なことの出来さうな道理が無い、凡夫にはやはり平凡なことしか出来ないのだ。だが併し、私共は極めて平凡な日常の所作の上に、聖賢の非凡を見出したのである。そして佛様から善哉々々汝よく力めたりとの御ほめの御ことばを頂戴したのである。人間のはじまりは夫婦であるから、先づ其の極めて平凡な夫婦關係から、平凡の非凡を生み出して、眞摯に如實に眞劍に、一切の事々物々に善處して、お前が地獄ならば法華經は嘘ぢや、お前が地へ墮ちるなら、わしも一緒に同地獄じやと、聖祖より云つて戴きたいが、然らばゆかなくとも、

「善哉」と只一言ほめていたゞくやうになりたいたものである。

一生が間離ること無き比目魚の如く、佛と私共凡俗とは、いつも離れずにつきたいものだ。夫婦の間紛紜があり破綻を捲き起すやうでは、決して善事が生れつこない。夫と妻とは兩體一身の妙境に入らねば、眞に幸ある夫婦關係ではない。佛と凡夫の間、聖交によつて、神人合一の境地に到らなければ、未だ人生の彼岸に達したとは云ひ得ない。夫婦和合の悦を此の聖訓の泉から汲みとらねばならぬ。

心の師とはなるとも心を師とせざれ云云。  
心の師とはなるとも心を師とせざれ判つたやうで判り難い、判らんやうだが判つたやうな、然も心の奥底に、或る強い刺戟を受ける難解の聖語である。什麼意味であるか私にはよく判らないが、「王地に生れたれば身をば隨へ奉るやうなれども、心をば隨へ

奉るべからず」愛染堂の別當、一千町の田地、そん麼ものが何欲しからう、「日本國の位を讓らん、法華經を棄て、觀經等について後生を期せよ、父母の頭を刎ねん、念佛申さずば、なんごの種々の大難出來すとも、智者に我義破られずば用ひじとなり」

「其義に負けてありとも其心驕へらずば天壽をも召し取られよ」恚う迄堅く決心して奮闘し來りしに、一千町の田地、愛染堂の別當、會は決してそん麼物の爲に誘惑されるものではない、「三度諫めて用ひざれば云云」とて、身延の山奥深くわけ入つて、聖默諫遊ばされた聖人の御態度から推解し奉れば、淺慕な自分の心を憑みにして、自己中心の御都合主義、利己的打算から事を處してはならない、心の師とはなるとも——即ち自己よりもズット偉大なる、佛を模範とし眞理を憑みとして、何事も佛の教へるが儘眞理の命するが儘に、事に當つて善處せねばならぬ。凡夫の淺慕な考から割出して、權勢に憧れ名利に惑

ふの輕舉妄動に出てはならぬ。飽迄も眞理を熱愛し正義を遵奉して、佛を手本とし法を中心として、只驕らに進まねばならぬ、との聖意であらうと思ふ。

「依法不依人、依義不依語、依智不依識、依了義經、不依不了義經」とは佛涅槃の夕最後の御遺誡、「修多羅と合する者は録して之を用ひよ、文無く義無きは信愛すべからず」とは天台大師の御言葉、「佛説に依憑して口傳を信受すべからず」は傳教大師の御教である。日蓮聖人は、毎も立像の釋尊と法華經一部を隨身にさす懐中して、「日蓮は佛の御使なり」佛勅をむきがたければ」とて、些の私心を掃き、本佛釋尊の遺命の儘に、「一心欲見佛不自信身命」「身輕法重死身弘法」眞摯に如實に、直往過進勇猛精進、「日蓮先驅したり、若黨共二陣三陣擯けよかし」と、信心の師とはなるとも心を師とせされ、實に尊くも有難い聖語である。



# 各地教報

京都布教 十二月一日 本山に於て講義會

講演「信仰論」三好真月師△同日於本山新座  
數青年宗教研究會「日蓮主義」有田安道師、御  
遺文講義「原田日勇師△二日夜於本山講堂  
正合例會「佛敎の大綱」原田日勇師△八日於  
成就院講正婦人會例會「回顧一年」有田安道  
師△同日夜川東本正寺に於て二樂會例會「社  
會問題と日蓮主義」細野長雄閣下「釋尊の知  
見と社會觀」原田日勇師△九日於正行院正行  
婦人會例會「歷史法話」原田日勇師△十二日  
夜於本山講堂青年會例會「宗教復興」能仁孝  
教氏

本正婦人會初會 一月十一日午後十二時  
半集合川東本正寺に開會、講師「挨拶」金光  
山主「我國將來の婦人」僧正能仁孝一師「訓  
話」陸軍少將細野長雄閣下◎餘興、琴、千鳥  
六段及薩摩琵琶、福引數香ありたり。  
大阪教報 △十二月四日堂園寺にて學生日  
蓮鐵佛會「正しき道」中川文學士△五日蓮成

寺にて談話會本ノ宮和井田兩氏の所感「五綱  
に就て」京藤布教師△九日婦人會「受持文に」  
京藤師「御遺文に翻はれたる婦人」藤原僧正  
△十日「報恩抄大要」上田師△十二日堂園寺  
にて「日本國と日蓮聖人」石井氏「幸福増進  
の道」上田師△十三日平山宅にて「法華經の  
大要」京藤師△二十二日堂園寺にて「佛界縁  
起論」和井田氏何れも盛會多大の効果を奏せ  
り。

鳥取縣下 十一月廿七日夜、松崎本立寺に  
於て會式祝敎「信仰の妙味」富田日蓮△十二  
月一日夜、青谷町統一團支部例會にて「日蓮  
主義者の態度其四」富田日蓮△十日午後、市  
橋宅にて「日蓮聖人傳其八」富田日蓮△十二日  
夜、鳥取市五ヶ峯寺に於て「吾が宗徒眞に  
自覺すべし」富田日蓮△十四日夜、倉吉町矢  
口齒科醫院にて「日蓮主義の本領」富田日蓮  
△廿八日、午後二時より青谷町立正寺にて「開  
會之辭」野崎惠貞「日蓮主義と家族主義の特  
長」野崎善太郎「法華經の特色」富田日蓮。

金澤教報 △一月六日日本多町河合氏「本佛  
中心の信仰」△十一日日本多町山口氏宅「現代  
信仰思想に就て」△十二日給坂町承証寺「宗  
敎思想に就て」講演聽衆百五十名盛會以上仁  
一十師講演△十三日六斗林本覺寺に於て不情  
身命の戦士日蓮上人の靈跡と信條を記念する  
ため常樂會の組織成り、此の日會式を舉ぐ、  
芝野醫師「日蓮上人の略歴」芝沼謙城師「法  
悦に住して」能仁一十師「本佛の慈悲に感激  
して」△十七日中主馬町渡邊氏宅に於て能仁  
一十師「本佛と題目に就て」△廿二日午後二  
時本長寺に於て婦人會初會を催す此日積雪二  
尺吹雪は咫尺を辨ぜず寒威を極めしも集るも  
の多數、杉田常政師「日蓮上人正傳」能仁一  
十師「冬は必ず春となる」琵琶演奏、福引の  
余興あり△廿六日午後七時本長寺に於て天晴  
會例會を開く能仁一十師「佛敎信仰の大義」  
高岩信行學會 去る十二月十一日市内妙  
國寺に於て高岩信行學會と日蓮主義普及會俗  
合併の下に皇孫殿「御誕生奉祝紀念講演會開  
催。島山友次郎(日友)氏「佛敎と經濟思想」。  
土屋勝雄師「讀んで皇孫殿下の御誕生を祝  
す」昇塚本勇師「小松原法親の日蓮」遠く小  
杉、新溪方面より聽講あり有識階級も多少  
あり二百名の盛會であつた。

## 蓄音機

### 大僧正本多日生師吹込

- 一、宗教信仰の必要
- 一、佛敎信仰の歸結
- 一、佛敎の卓越せる所以
- 一、聖語

取次所 統一編輯局

### 本多日生現下著小冊子

- 自我 偈 講 義
- 修法勸行の心得
- 宗教の五綱
- 教育勸語と思想問題

- 一部金廿錢送料金貳錢
- 十部金壹圓送料共
- 一部金十五錢送料貳錢
- 十五部金壹圓送料共
- 一部金拾五錢送料金貳錢
- 十五部金壹圓送料共
- 一部金貳拾錢送料金貳錢
- 十部金壹圓送料共

名古屋市東區田代町城山

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

多數購讀の節は特別割引す御照會下さい

### 寄附

- 一金壹百圓也 東京統一團本部へ
- 一金壹百圓也 東京淺草妙經寺内 四恩教林へ
- 一金壹百圓也 東京品川 妙國寺へ

(百圓の價格大の品物を納附す)

- 爲故 統一團擁護者 五十嵐正氏菩提
- 東京府下大崎町上大崎五三四 施主 五十嵐一氏
- 寄附
- 一金壹百圓也 東京統一團本部へ
- 爲故 統一團擁護者 藤澤智明氏菩提
- 東京府下澁谷一八五一 施主 藤澤ふじ子氏

以上

